

山陽新聞紙齢5万号記念

高校生大討論会

—大人でも子どもでもない私たちにできること

持続可能な未来、地域循環型の共生社会の実現を目指し、岡山県内の高校生が意見を交わす「高校生大討論会—大人でも子どもでもない私たちにできること」(山陽新聞社主催)が8月27日、岡山市北区柳町の同社で開かれた。

山陽新聞の紙齢5万号を記念し、初めて企画。参加した14校の約40人は「地域活性化」「教育」「環境」など七つのテーマ別に課題解決に向けた方策を議論し、同社さん太ホールでその成果を発表した。各自の感想やメッセージを記入し、壇上で掲げた。

自身が社会の中核を担う2050年の目指す地域の姿を想定し、自治体への大胆な提言や新技術の活用といった高校生らしい視点の内容がそろった。発表の様子は山陽新聞社のホームページで30日まで視聴できる。

司会者の感想

未来変えられると実感

沢田まりあさん(岡山後楽館2年) 充実した議論ができ、未来を変えられることを実感できた。光が見えたかのような感じ。協力的な仲間がいることが分かり、心強く感じた。今日で終わりではなく、また次にみんで話し合えることを楽しみにしている。



できること探して行動

田中希莉子さん(金光学園2年) テーマを決めるところから準備を進めてきたが、いろんな意見を持っている人たちが話ができよかった。私は教育について討論した。すぐに結論を出すことは難しいが、自分でできることを探して行動に移していこう。



岡山の良いところ発信

堀亜季奈さん(清心女子2年) 実行委員として打ち合わせを進めるにつれ、岡山のあら探しではなく、良いところを発信できる討論会にしたいと思った。その通りにできたと思う。そういう高校生がたくさんいる岡山は、「大丈夫」だなと思った。



学校の垣根を越え意見

加集凛さん(玉島2年) 学校の垣根を越えて意見を出し合う場を持てうれしい。学校では学べないことをたくさん知ることができた。大人でもないから固くもないし、子どもでもないから現実的でもない案をたくさん出すことができる。



発表要旨

2050年 目指すべき 岡山の姿は

人を呼び込むことが大切

住み続けられるまち まちを良くするために、岡山から外へ人を出さないこと、人を呼び込むことが大切。インターネットを活用すればオンラインで仕事ができ、地方にいても都会の企業に就職できる。外から人を呼び込むため、10、20代と子育て世代への政策を充実させてほしい。SNS(交流サイト)を通じて地域の魅力を発信することも重要だろう。若者、高齢者、障害者ら全ての人が快適に過ごすことができ、交通や物がそろっているけど、人が多すぎないまちが理想だと思う。

催しで心の距離感を近く

地域の交流とつながり 私たちが目指すべきなのは、住んでいる全ての人のつながりが深い社会である。新型コロナウイルスの影響でいろんなイベントが中止・廃止になっているが、人との心の距離感を近づけるためにできるだけ続けたい。私たちが地域の運動会などに参加していいことが大切だ。授業を通して地域と関われるよう、先生に「こんなことがしたい」という提案や相談をしていきたい。どうすればいいか分からないときは、ネットを活用して自ら探究することもできる。

昆虫食普及へ「県虫」制定

周年を快適に暮らすため 限られた資源を無駄にせず環境を守るためにできることを考えた。服は必要なのに注ぎ込んでしまうようにして廃棄を減らす。若者が選ぶ「ダサイ服総選挙」をし、結果を発表する。メーカーも人気の物は作らなくなる。タンパク質が豊富な昆虫食を普及させる。県鳥のように県虫を制定し、給食にも採用する。たとえば、小魚アーモンドならぬイナゴアーモンドといった具合に。また、建物をコンテナに変えれば、災害時のがれきも減らせるだろう。

パートナーシップ制度を

同性婚とLGBTQ 性的少数者のカップルを公的に証明するパートナーシップ制度を岡山県内の全市町村が導入してほしい。学校のルールや校則の見直しも求める。個性を失わないよう、私たち生徒の側から声を上げていきたい。

理解を深めイメージ改善

生理について タブー視されがちなテーマを、男子を含めて話し合えた意義は大きい。生理に対する理解を深め、イメージを改善していくことがジェンダー(社会的性差)平等につながると感じた。そのため必要なのは、当たり前の環境をつくること。例えば生理用品の無償配布を進めてほしい。学校など公共トイレに、トイレトイペーパーと同じようにナプキンを置く。女性にとってなくてはならないものだからだ。継続的な支援の実現に向け、自治体と呼び掛けたい。

地域と交流の場つくる

何のために学ぶのか 勉強する意味がよく分からないという意見が議論を通じてたくさん出た。学んだ知識がどう役立つのか、知識だけでなく将来必要となる力も学んでいきたい。進路の選択につながるよう、実際にいろんな仕事に就いている人に学校に来て話をしてもらったりすることも必要だと思う。コロナ禍で外部との交流が減る中、学校が地域の人が交流できる場をつくるべく、できればと思う。いじめや不登校で登校できない人が減るよう、何でも相談できる先生の人数をもっと増やしてほしい。

意思疎通能力を高めたい

在留外国人のために 外国人にとって住みやすい社会にするには、差別や偏見をなくさなければならぬ。交流の場を増やし、互いの文化を学ぶ場を設けたい。高校生が自発的に企画することが大切だと思う。日本語を勉強するだけでなく、動くために日本に来ている外国人もいる。今日の議論の中で、言葉の壁を乗り越えることができるよう、「翻訳機を使って会話をしよう」というアイデアも生まれた。新しい技術も活用しながら、コミュニケーション能力を高めていきたい。



コーディネーター 室貴由輝・岡山県教委高校教育課高校魅力化推進室長 ■ 石原達也・岡山NPOセンター代表理事 ■ 岡山一郎・山陽新聞社論説主幹